

(2) イベントを母体にして、新しいボランティア活動が生まれていく

団体名		全日本どろんこ田んぼバレーボール協会(長野県辰野町)	
	活動開始年	西暦 1996年 8月 活動開始	
	メンバー 人数	<役員数> 14名 <事務局スタッフ数> 会員で有志参加 <ボランティア数> 地域の住民全員 <賛助会員数> 64名位 <その他> 集落戸数 70戸 住民 300名	
		構成	役員は会社員がほとんどで、公務員が少し 地域のボランティアは兼業農家がほとんど
	予算規模	平成13年度概算 協会本部会計 大会会計 収入 267,749円 収入 228,050円 支出 61,492円 支出 220,723円	
団体の目的		農業を通じ土づくりの大切さ土の温かさを肌で感じつつ、自然のはぐみを多くのひとに知ってもらおうと共に、「どろんこ田んぼバレーボール」により体力の向上と地域交流を図るため、競技大会の開催と競技の普及を目的としている	

ボランティア活動の概要

大会の企画は役員（無報酬）が主になって行いが、準備、運営、交通整理、資材提供はボランティアが自主的に行う。全国どろんこ田んぼバレーボール大会（通称：どろんこ田んぼバレーボール大会）を通じ、地域での自然保護活動や花いっぱい活動といった自主的なボランティア活動が抵抗なく受け入れられてきている。

ボランティアは特別な募集はしておらず、活動の都度各家庭に趣旨のチラシを入れて、自主参加をしてもらっている。

ボランティア活動を立ち上げた経緯

メンバーの住む辰野町渡戸地区は70戸約300人が暮らす山間地にある。春から秋にかけて自然の景観がすばらしく、少子・高齢化は少しずつ進んでいるが、空家は少なくみんながゆったりと暮らしている地区である。しかし、近年の減反政策によって、稲作からの作付け変更を余儀なくされ、農家の意欲が減退してきた。

そこで、なにか田んぼを使って「遊び」ができないかと、いつもの飲み仲間（集落に住む40歳代の男衆）が頭を突き合わせ、「あーでもない、こーでもない」と酒を酌み交わしながら考えた。たまたまその頃「ビーチバレー」が有名になり、「俺たちにゃ、田んぼがある。田んぼでバレーボールをしよう。」ということになった。それからは、協会の立ち上げと会員募集、競技ルールづくりに夜な夜な集まって知恵くらべ。それでも、なんとかまと

まって、平成8年8月8日に協会が立ち上がったのだった。出来るだけ農業に使われている道具を使い、手作りのできるように心がけた。ルールはトリムバレーボールの5人制を採用した。入賞商品は地域でとれた農産物が主体で、ときには付近で捕れた「田舎どじょう」も加わる。

第1回大会を平成9年7月に開催し、晴天にも恵まれて、7チーム50人が参加。参加者には、初めての体験にとまどいながらも、土の感触と競技を楽しんでもらった。参加チームはPR不足から地元の寄せ集めだったが、アマチュアカメラマンが100人も押し寄せ大賑わいだった。このときの写真があちこちで取り上げられて、以後の大会には参加申し込みが倍倍と増えていった。昨年の第6回大会には120チームの申し込みがあったが、会場の都合によって56チームに限定させてもらった次第である。

参加チームには若い人が多く、この日は集落がぱっと明るくなったようになる。

大会の運営は役員中心に企画しているが、準備や案内、豚汁のサービスなどに、地域の人々が自主的にボランティアとして参加してくれている。これを契機に、地域の貴重な資源を大切に作る取り組みが始まっている。

活動を行ううえでの困難点と工夫

地域の皆さんの理解と協力があり、困難は余り感じていないが、役員が皆勤め人なので、会議などは夜間が多く日程調整に気を使う。この対策として役割分担を細かくして、会議を最小限にしている。

申し込みが多数となったため問い合わせが頻繁にあるが、担当理事が会社勤務のため対応しきれない状況である。問い合わせはできるだけハガキかメールでされるようPRしている。

活用している支援

できるだけ手作りでお金をかけないようにしているが、人が集まればお金はかかる。地区の営農組合と耕地(町内会のようなもの)から補助金をもらっているが、できれば、チーム参加費で運営したいと考えている。

活動を継続するための工夫など

メンバーには勤めの人が多いのだが、休日に行事が集まるので、出来るだけ年間計画をたてて調整するようにしている。退職して自宅で農家をしている人が割合多いので、準備などはこの人たちにできるだけお願いをするなどの役割分担の工夫をしている。地域全体の活動ととらえて、集落内の各種団体も構成員となってもらっている。

今後の課題と展望

現在、どろん田バレーボール大会は参加申し込みが多く盛況のうちに開催できているが、

あちこちで同種の大会が増えている。差別化を図るためにも、手作りで農業にこだわり、心のこもった大会をしていきたいと思っている。

特定の役員が協会設立から継続して担当しているため、次世代へのバトンタッチをスムーズにできるよう、人材の育成を図っている。

谷間の集落なので、参加チームの増加とアマチュアカメラマンの増加で駐車場が不足しており、駐車場の確保が課題となっている。

今年も、「どろん田バレーボールをオリンピック種目に 追いつけ追い越せビーチバレー」を目標に大会準備が始まった。

ボランティア活動の成果

どろん田バレーボール大会の開催場所として提供いただいた「たんぼ」の管理を契機として、たまたま集落の大きな稲作者が耕作をやめたことから、水田の一括管理をするため集落全戸加入の「営農組合」が結成された。

営農組合の活動は水田の委託耕作が主だが、この活動のなかから、地域内の自然排水路の管理をして、どじょうや蛭などの水生生物の営みに「ちょっとお手伝い」をするボランティア団体「ほたる君とどじょうこ俱樂部」が誕生した。さらに、休耕田を花畑にしたり農道沿いを花で飾るボランティア団体「愉快的ひまわり仲間」が結成されていった。

また、これらの活動と合わせ、谷間の7集落が集まった「信州かわしま花街道連絡会」が立ち上がり、川島の谷の全体の景観づくりのために活動している。

自分の住む地域を自分たちで住み良くするために、自分たちでできることは自分たちでする活動が、少しずつ広がっていると自負している。



< 試合風景 >



< 米袋で作った手作りの優勝旗 >

(団体理事によるレポート、団体資料より作成)

<事例のポイント> 地域おこしのためのイベントが気軽なボランティア活動の機会に

ボランティア活動には、ボランティア団体を結成して常時活動を行うタイプのものと、イベント開催のために一定期間だけボランティア活動を行うタイプとがある。全日本どろんこ田んぼバレーボール協会の事例は、後者の例である。この事例では、盛況のうちに毎年イベントが継続されているが、単発のイベントでボランティア活動を行う場合もある。

イベントの企画・準備・運営に関わるボランティア活動は、イベントそのものの楽しさも手伝って、誰もが気軽に参加しやすいものである。このような機会は、ボランティア活動への関心はあるが、なかなか参加のきっかけをつかめないでいる人々にとって、最初の一步を踏み出すための好機となる。

<事例のポイント> 地域の人々の参加を歓迎する手作りのイベント

イベントの企画・運営のコアの部分は、協会の役員を中心に行っているが、それ以外の準備や当日の案内、豚汁などの参加者へのサービス等に、地域の人々が自主的に参加することができる体制となっている。また、この団体の役員には勤め人が多いので、予め年間計画を立てて日程調整ができるようにする、役割分担を明確化して会合の回数を減らすなどの工夫がなされている。イベント開催にあたっては、企画・運営のコア部分を担うボランティアへの負荷が大きくなることから、このような工夫が効果的である。

どろん田バレーボール大会は地域のボランティアによる手作りのイベントであるが、この他に、行政が実施するイベントにボランティアとして参加する場合もある。このような場合には、ボランティアが自主性をもって支援活動をすることができるように、ボランティア委員会のようなボランティア主体の組織を作って、主催者側と役割分担等について話し合いながら進めることが望ましいと考えられる。

<事例のポイント> イベントから新しいボランティア活動が誕生

この事例では、全日本どろんこ田んぼバレーボール大会のイベント開催を通じて、開催地区の農家の間の結束が強まり、集落全戸加入の営農組合が結成された。ボランティア活動が地域のまとまりを強くすることに貢献した事例である。

この営農組合の活動を通じて、自然排水路の管理をして水生生物が住みやすい環境づくりを行うボランティア団体や、休耕田を花畑にする等の活動を行うボランティア団体等が生まれていった。

この事例が示すように、イベント開催を通じて得られたボランティア活動の体験が、次のボランティア活動へとつながっていく可能性がある。イベント開催後に、もっとボランティア活動をしてみたいと思っている人々に活動機会の情報を提供したり、あるいはイベント・ボランティアの有志が集まってボランティア活動を行おうとする取り組みを丁寧に支援していくことも、ボランティア活動のすそ野を広げていくうえで重要である。